

保健医療分野の中でも、母子保健の課題は深刻だった。妊産婦10万人当たりの死亡率は日本の4.1人に対して450人(2010年)、5歳未満児1000人当た

は、これまで同様の課題を乗り越えてきた経験とアンゴラと同じポルトガル語圏という強みがある。ブラジル人と日本人の専門家がタッグを組み、患者一人一人のカルテを導入するなど、医療施設がうまく機能する仕組みづくりを支えていくことになった。

**母子健康手帳で意識の変化を**



妊産婦手帳や子ども健康カードのコピーを壁に貼り、アンゴラ版母子健康手帳の構成を議論する委員会メンバーと定森さん(中央)

共により現状を変えようと奮闘しているのが、長年ブラジルでHIV/AIDSの専門家チームだ。力を入れているのは、日本でおなじみの母子健康手帳の導入。保健省のアントニオ・コスタ人材局

の死亡率は158人(2011年)で世界ワースト8位だ。女性たちにとって、出産はまさに「命懸け」であり、子どもたちの健康も脅かされていた。その原因の一つは、妊産婦や子どもの健康を継続して管理する仕組みができていないこと。産前産後健診の記録をつける「妊産婦手帳」、子どもの予防接種を記録する「子ども健康カード」はあるが、出産後は「子ども健康カード」だけあればいい」と妊産婦手帳は捨てられてしまふ。産前産後の健康状態を継続的に記録することで、次の妊娠への適切な間隔やリスクなどが分かるが、そういった認識が浸透していなかったのだ。

「妊娠期間の正しい食生活など、これまでなかった情報を入れるのはどうですか？」  
みんなで手を動かしながら作った試作版は、なんと1年で完成にこぎつけた。定森さんは、「お金ではなく知識や技術を教える」と話す。試作版を手にしたコスタさんも、「手塩にかけて作った手帳は娘のように大切な存在であり、

「予防接種の種類を新しく追加したページを作りましょう」  
「妊娠期間の正しい食生活など、これまでなかった情報を入れるのはどうですか？」  
みんなで手を動かしながら作った試作版は、なんと1年で完成にこぎつけた。定森さんは、「お金ではなく知識や技術を教える」と話す。試作版を手にしたコスタさんも、「手塩にかけて作った手帳は娘のように大切な存在であり、



子ども健康カードを持って予防接種に来た母親たち

医療技術の研修を実施するブラジル人専門家(左)。母子健康手帳の普及も日本と協力して進めていく



病院でいくら待っても、診察してもらえない。帝王切開の緊急手術を受けなければならぬのに、バスに乗って自力で病院に向かわなければならぬ。出産してわずか6時間後に、赤ちゃんを抱えて退院しなくてはならない。...

イラストを多く使い、分かりやすいよう工夫した試作版。表紙のイラストを夫婦と赤ちゃんにしたのも、家族で育児をしようというメッセージだ



んと受けることができず、医療技術や知識が十分とはいえない。そこで日本は、アンゴラの保健医療サービスの改善に向け、医療施設の整備、医師や看護師などの人材育成を支援することになった。そんな日本の強力なパートナーとなったのがブラジルだ。彼らに



「出産・育児は女性がするもの」という認識を変えるために、母子健康手帳を通じて父親の育児への参加を促す



# 母子の未来を守る手帳

長年の内戦が終わり、成長を続けるアンゴラ。しかし、保健医療サービスへのアクセスをはじめ、人々の生活に直結するニーズは十分に満たされていない。その改善に向け、日本の「あるもの」が導入されることになった。